

## 清水 誠『現代オランダ語入門』(別売 CD 付、大学書林 2004)

本年 2024 年 3 月の北大文学研究院退職に際して、研究推進室からの要請にお応えする形で、拙著『現代オランダ語入門』(別売 CD 付、大学書林 2004) にまつわるエピソードを略述させていただきます。

以前、「書香の森」の紹介文に記したように、本書は、国内では独学によるほかなかった私自身の苦い学習経験をもとに、オランダ政府奨学金 (NUFFIC) の援助で 1993 年から 1 年間、オランダ北部のフローニンゲン大学フリジア語学科 (Fries Instituut, Rijksuniversiteit Groningen) に滞在した後に執筆した入門書です。独自に考案したカナ発音や英語とは根本的に異なる語順など、日本人学習者の立場を重視して、現代言語学の視点も随所に取り入れました。各課には、現地での生活から得た言語と文化に関するエッセイを添え、巻末には、100 冊余りの辞書、参考書の内容を紹介しています。余白に添えた写真は、ほとんど私が撮影したもので、クリスマスを迎えた家庭や野外博物館でのひとこまには、息子の姿も載せています。当時としては、日本語で書かれた最もくわしいオランダ語の記述でした。その後、拙著『オランダ語の基本』(三修社 2019) がそれに代わることになります。

ただし、ドイツ語を専門とする私がこうした書物を世に問うのは、本来の在り方とはい切れません。江戸時代には、オランダ語は蘭学を通じて日本の知識人がこぞって学んだ外国語でした。しかし、開国とともに、オランダ商館の切実な嘆願も空しく「見捨てられ」、明治政府はドイツ語、英語といった威信言語に乗り換えていきました。現在、日本にはオランダ語を専攻できる大学はなく、公式な意味での専門家もいないのです。異文化理解と受容という観点に照らした場合、はたして健全な姿と言えるでしょうか。

一方、オランダ語圏では、日本文化への関心はかなり高いようです。十数年以来、私は国際交流基金から依頼を受けて、翻訳出版助成プログラムの一環として、日本文学のオランダ語圏への紹介申請に関する審査をお手伝いしてきました。対象作品は実に多彩で、夏目漱石『こころ』、五味川純平『人間の条件』から、東野圭吾、柴崎友香、小川洋子、柳 美里、川上未映子、吉田修一などの現代作家に及んでいます。『源氏物語』の全訳 2 巻本の寄贈を受けたときには、ことのほか深く感じ入りました。翻って日本では、『アンネの日記』のほかに、オランダ語圏の作品がどれだけ知られているのでしょうか。

さて、話題を『現代オランダ語入門』に戻すと、その刊行に至る過程には、北大との不思議なご縁があるような気がしてなりません。それは少年時代の体験にさかのぼります。

私は伊豆の小さな町に育ちました。そこは大都市の札幌とはまるで違って、大学に進学する者は、全員が親元を離れざるを得ない田舎でした。予備校の類などなく、学習塾に通ったこともありません。小学 6 年生の頃、海外旅行ブームの中で紀比呂子さん主演の「アテンションプリーズ」という客室乗務員の物語がテレビで放映されましたが、そのタイトルの意味がだれに聞いてもわからず、悄然とした気持ちになったのを覚えてい

ます。そんな中で唯一、頼りになったのが、ラーメン代の半分ほどの値段で手に入るNHK ラジオ講座のテキストでした。受信料に十分見合うほど利用しましたが、中学2年生のときにドイツ語講座、3年生からはフランス語講座を聞き始めました。そして、それに合わせて手に取ったのが、三島市の本屋に置かれていた大学書林の徳尾・畠中著『フランス語四週間』でした。音声教材もついていないモノクロ文字だけの世界でしたが、一連の四週間叢書が書棚に居並ぶ姿は、中学生の目には壮観に映りました。こうして、大学書林は憧れの出版社となったのです。

大学入学後、2年間の教養課程では、第2外国語にドイツ語を選択しました。その際、最初の時間に教室に現れたのが、中学時代にNHK ラジオ講座を担当されていた平尾浩三先生だったことには、驚きました。しかも、教科書はその時のテキストの内容をまとめた『新ドイツ語入門』(白水社 1976) でした。おかげで新しく学ぶことはほとんどなく、余力を他の言語への関心に向けることができました。これはけっして特別なことではありません。外国語の学習はいつ始めてもよく、現行の制度はこの国の画一的な文教政策の縛りにすぎません。

学部進学後は、文学部の独文科に籍を置きましたが、動機は上記の経緯とは無関係です。当時、私は家庭の事情も考慮して親の援助を嫌い、複数の奨学金を頼りに育英会の寮に居候していました。留年などしようものなら、たちまち一文無し、宿無しになってしまいます。そこで、ドイツ語教師の就職口がまだ信じられないほど多かった独文科を選んだのです。そこはドイツ文学の研究に特化した場所で、居心地は良くありませんでした。それでも、上記の理由で進路を変えるわけにはいかず、周りの雰囲気を見ずに、言語学科の優秀な先輩方を仰ぎ見ながら、ゲルマン諸語の把握を目指しました。

そんな中で、学部3年生の頃、大学書林から『オランダ語文法入門』(1979) という本が出ていることを知りました。著者は、北大文学部の独語学講座(当時)でご活躍だった塩谷 饒(しおや ゆたか)先生(1920~1996)でした。塩谷先生はルター聖書の研究で著名なドイツ語学者で、独語学講座の開設とともに京都大学から着任され、学部長や図書館長も歴任された方です。当時の北大文学部には、全国の諸大学には珍しく、ドイツ語を言語学的に探求する組織が置かれていたのです。ただ、その頃の私の興味は北欧諸語にあり、卒論はドイツ語とスウェーデン語のアスペクトとヴォイス、修論は中世のドイツ語(中高ドイツ語)の動詞接頭辞を扱ったものでした。オランダ語からは、どことなく漠然と「田舎臭い」印象を受けたのです。それでも、一応は知っておこうと思い、通学中に西武池袋線と丸ノ内線の車内で1ヶ月ほどかけて通読しました。読後には、理解できない点がいくつも残りました。周囲には、オランダ語を解する先生は皆無でした(少なくともそのように見えました)。そこで、思い切って、著者の塩谷先生にお手紙を差し上げたのです。すると、数日後、奥様から、主人は只今、ドイツ出張中のございます、帰国後、お返事を差し上げます、という旨のお葉書が届きました。そして、1ヶ月弱後に、先生が速達で封書をお寄せくださいました。その中には、便箋3枚にわた

って丁寧なご回答が添えられていました。今でも、そのときのお手紙は、稚拙な質問のコピーとともに同書の表紙に大切にはさんであります。しかし、当然ながら、後に私が先生の後任として北大に赴任することなど、想像もしていませんでした。

その後、大学院修士課程を終えると、今では考えられないことですが、修論以外に何の業績もないまま、首尾よく助手の職にありつき、国家公務員の身分に収まりました。そして、2年後には公募を通じて、首都圏の国立大学に専任講師として採用されました。すると、ある日、大学書林の佐藤政人社長（当時）から突然、お電話があり、奥様とともに研究室にお見えになることになったのです。そして、こういう商売をしているもので、何か本を書いていただけないか、と切り出されました。二十歳代半ばの駆け出しにすぎない私には、何のことだかわからず、すっかり当惑してしまいました。しかし、その励ましの言葉は念頭から離れませんでした。それから十数年たって、本書が世に出たときには、少年時代からの憧憬が形を取ったような気がして、感慨ひとしおでした。

北大への転出が内定したのは、本書の刊行よりもかなり以前のことです。これも今日ではあり得ないことですが、まったく面識のない先生からご連絡があり、いらっしゃいませんか、というお誘いに、二つ返事で決まってしまったのです。そんな恵まれたのどかな時代でした。札幌はそれまで一度も足を踏み入れたことのない土地でしたが、偶然、家内が当地の出身で、義理の父が北大の工学部に奉職しており、その兄も札幌医科大学で教鞭を執っていたこともあって、違和感はありませんでした。赴任する前年の夏休みには、北大退官後、北星学園短期大学の学長を務めておられた塩谷先生のもとを家内とともにお訪ねして、初めてお目にかかりました。先生はさっそくタクシーを飛ばして正門までお連れくださると、そのまま附属図書館の1階に入られました。そして、館長室の扉をノックされて、「これが私の後任だ」と当時の図書館長に紹介されたのを鮮明に覚えています。まだ正式な決定以前のことだったと記憶しています。

最後になりますが、本書のテキストの録音は、フローニンゲン大学で音声学の教授を歴任されたデ・フラーフ先生 (dr. Tjeerd de Graaf) と奥様にお願いしました。このことも北大と無縁ではありません。本書がきっかけとなって、私はオランダ語に関する単著を4冊、執筆することになりましたが、録音にはいずれもご夫妻にご協力いただいています。デ・フラーフ先生は物理学出身の音声学者・民族言語学者で、シベリアの少数民族言語やアイヌ語の現地調査、少数民族の言語文化の擁護にことのほか熱心で、北大にも何度も来訪され、日本語も理解されるポリグロットです。ご退職後も、オランダ学士院の関連機関フリスケ・アカデミー (Fryske Akademy, KNAW) に置かれたメルカートル・ヨーロッパ研究所 (Mercator European Research Center on Multilingualism and Language Learning) でヨーロッパの多言語使用と言語教育の擁護・普及に尽力されています。

私がフローニンゲン大学滞在中に行ったのは、オランダ第二の地域公用語で少数民族語の西フリジア語 (Westerlauwersk Frysk, 話者数約35万人) の調査とその文法記述でした。これは、ドイツ学術交流会 (DAAD) の援助による1988～1990年のドイツ滞在中に、後

半の 1 年間をキール大学北フリジア語辞書編集所 (Nordfriesische Wörterbuchstelle, Christian-Albrechts-Universität zu Kiel) で北フリジア語 (Nordfriisk) を専攻した後に残された大きな課題でした。その後、2003 年には、博士論文「西フリジア語文法—現代北海ゲルマン語の体系的構造記述とゲルマン語類型論構築のための基礎的研究」(<https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/handle/2115/32659>) を北大に提出しました。そして、さらに 1 年間かけて改訂を施し、科研費 (研究成果公開促進費) の交付を受けて、『西フリジア語文法—現代北海ゲルマン語の体系的構造記述』(北海道大学出版会 2006) として上梓することができました。その大切なきっかけとなったのが、西フリジア語の母語話者でもあるデ・フラーフ先生との北大での出会いだったのです。デ・フラーフ先生については、キール滞在の終わりに、オランダ・フリースラント州の州都レーヴァルデン (Leeuwarden, 西フリジア語名リャウエト Ljouwert) に置かれたフリースラント州教育委員会 (MSU) のフリジア語教育セクションを訪れた際に、詳しくうかがっていました。そして、1992 年の夏に、偶然、クラーク会館にご滞在になっているという噂を耳にしたのです。夜分にもかかわらずお電話を差し上げると、すぐに来なさいと言われ、直行しました。こうして、フローニンゲン大学フリジア語学科との連絡を取り持っていたいただきました。その後は、翌年の同地滞在から 30 年余りの間、札幌とフローニンゲン等で何度もお会いし、多方面でお世話になっています。

以上のように、本書には個人的な思い出の数々が詰まっています。その刊行までには、さまざまな場での出会いがありました。貴重な機会に恵まれた北大文学研究院在職中の日々を振り返るとともに、お世話になった方々に改めて深く謝意を表したいと思います。